

解することを試みた著者の実践は非常にチャレンジングであり、また本書の内容自体も学術的に価値あるものである。本書では、根拠となる科学的・空間的データを示しながらも、一貫して地域住民の立場に立った人文主義的視点から水環境問題を論じる姿勢が貫かれている。人文地理学をバックグラウンドとする著者は、当然のことながら水質分析をしたり、シミュレーションをしたりするような自然地理学の研究手法を用いて調査研究を行っていないが、それを補うべく、入手可能な水のデータと地形、土地利用、水利権などのさまざまな空間データを重ね合わせながら水環境問題に迫っていく。目的とする問題を明らかにするために、どのようなデータを組み合わせながら分析すれば良いのかを理解した上で、GISを援用した緻密な空間分析を行い、そして結論を導き出していくプロセスは、非常に分かりやすく説得力を持つ。それは、総合の学問としての地理学の典型的な研究手法を提示しているとも言える。著者のこのような能力は、人文地理学で博士を取得した後のキャリア（東京大学空間情報科学研究センターおよび酪農学園大学環境システム学部）で身につけたものと思われる。常に上を目指そうとする著者の研究に対する真摯な姿勢が本書で結実したとも言える。

評者が所属する大学では、学部学生の調査実習や卒論で、少なくとも毎年1人は「水」に関係するテーマを選ぶ学生がいる。おそらく他の大学でも同様だろう。そのような学生に「水を扱うのなら、こんな切り口がある」と示すために紹介する書として、本書は最適である。

最後に、著者は総合地球環境学研究所のプロジェクトなどのメンバーとして、日本のみならずアジア各地の水環境問題についても調査している。その調査研究の成果についても今後期待したい。

文 献

鳥越皓之・嘉田由紀子・陣内秀信・沖大幹編 (2006):『里川の可能性:利水・治水・守水を共有する』新曜社。

(横山 智)

森 和紀・佐藤芳徳著:『図説 日本の湖』朝倉書店, 2015年3月刊, 164p., 4,300円(税別)

本書は朝倉書店から刊行されている「図説 日本の〇〇」シリーズの一つであり、北海道から九州まで日本の代表的な38の湖沼あるいは湖沼群を取り上げて、それらの形態(湖盆図)や性質(水温・水質)、地勢、生態、人間生活とのかかわりなどについて解説したものである。本書は大別して2部構成になっており、「第I部 湖の科学」は、湖沼学の基礎的事項を具体的な観測事例も交えて解説した部分であり、「第II部 日本の湖沼環境」は、38の湖沼(群)の個別の解説である。

第I部は二つの章からなる。「第1章 湖の世界」では、湖沼学が閉鎖系としての湖に焦点を当てるだけでなく、より広域な流域スケールでの地下環境も含めた水循環を総合的に扱う学問であること、田中阿歌磨の山中湖調査にはじまる日本の湖沼研究が、湖の個々の性状を明らかにするものから、湖を総合体としてとらえる湖沼型の確立そして湖沼誌へと展開したこと、地球上の水に占める湖水の割合はきわめてわずかであり、その総量は容積で上位を占める限られた湖によって決定されること、日本の湖は、成因が火山活動に由来するものが多いため分布に偏在性があり酸性が強い点、大湖に占める汽水湖の地位が高い点、温帯湖と熱帯湖が混在する点に特徴があること、湖は温暖化に代表される地球環境変化や地域の環境変化を映す鏡であることなどが述べられている。

「第2章 湖の自然」では、湖・沼・池の定義、湖盆の成因による湖の分類、湖水と降水・蒸発・河川水・地下水・海水との間の水収支、湖内部における水の流動と循環、水色や透明度の尺度や測定法、湖沼研究における指標として水温やpH、溶存酸素、塩分の分布や動態を理解することの意義、湖自身の環境史だけでなく周辺地域の古環境復元にとっても重要な湖底堆積物、栄養塩濃度や埋積による湖の変化や人為的变化の抑制策などが説明されている。

第Ⅱ部は個々の湖沼（群）の解説であり、一部の例外を除いて見開きの左側に解説文、右側に図版が掲載されている。解説文の構成は、湖によっては触れられない項目もあったりするが概ね次のようになっている。まず最初に湖の関係位置と形成史、次に水深、面積、容積などといった形態に関する数値情報、湖水の平均滞留時間や流出入河川、そして水温、溶存成分、透明度の具体的数値とその特徴、最後に周辺地域も含めた動植物相や生態系、および漁業、観光、水利用などの人間活動とのかかわりや、環境問題とその対策について紹介されている。収録されている湖沼（群）は地方別に、北海道9、東北7、関東7、甲信越・東海・北陸8、近畿・中国・四国3、九州4となっており、東日本に偏っているが、これは本書の第Ⅰ部第1章で述べられているように、日本の湖全体の分布がそのように地域的に偏っているからである。

本書の最大の魅力は、「図説」とタイトルにあるように、豊富な地図、図表、写真がすべてフルカラーで掲載されていることである。なかでも特筆すべきは、ほぼすべての湖の湖盆図と水温および溶存成分の垂直分布が網羅されていることであり、この点において、湖沼学の基礎テキストとしての本書の資料的価値は非常に高いと言えるであろう。本書を一読すると、湖の垂直的構造を理解すること、すなわち湖の表面下にある見えない世

界に着目することが、湖沼研究にとってきわめて重要であるということがひしひしと伝わってくる。

評者は本書で取り上げたこれら38の湖沼（群）のうち約半数くらいへかつて訪れたことがあるが、それらの湖に関する記述を読んでいると、訪れた当時のことが思い出され懐かしいと同時に、それ以前に本書のような書籍と出会っていれば、もっと自然特性を踏まえた深く多様な視点で湖の景観を見ることができたであろうと悔やまれる。一方で、まだ訪れたことがない湖に関する記述を読んでいると、そこでどのような自然や人間の営みが展開されているのか知りたくなり、訪れてみたいという旅情にも駆られる。

ただ、本書を湖沼に関する一般向けの案内書として読むならば、特に第Ⅰ部の記述には一般の読者にとって十分な理解が難しいと感じる部分があった。せめて湖沼学・水文学の専門用語（温帯湖・熱帯湖、循環湖、水温躍層、肢節量など）については、初出のところで欄外の囲みや脚注などによる補足説明を付けてほしかった。また、本書が日本の数ある湖の中からこの38湖沼（群）を選定した根拠についても、「はじめに」で「水文学的に重要な湖」とあるのみで、とくに詳しい説明がない。これについても冒頭でもう少し説明がほしかった。

いずれにせよ、水文学・湖沼学の立場から書かれた本書はもちろん、その分野の学生や研究者に対して基礎知識を与えるテキストであり、データ集としての価値を有することは言うまでもない。一方で、人文地理学などの人文・社会科学の立場から観光や水利用など湖に関連するテーマを研究する者にとっても、それら人間の営みがなされる背景としての自然条件について知っておくことは必須である。その点において、湖に関心がある人文・社会系の学生・研究者にとっても、本書は常

に傍らに置いておくべき手引きである。

(山下亜紀郎)

吉田国光著：『農地管理と村落社会—社会ネットワーク分析からのアプローチ』世界思想社、2015年3月刊、202p.、4,800円（税別）

農地管理をめぐる問題は、今後の日本農業を予測する上で避けては通れない問題である。産業としての農業をどう維持していくかだけでなく、耕作放棄地や無秩序な農地転用の増加など、農地管理の主体が不透明化していく状況下において、農地移動のプロセスを詳細に検討することは喫緊の課題であると言える。本書は、必ずしも経済的合理性からのみ測ることのできない農地移動の実態を、社会ネットワークという新しい分析視角から明らかにしようとするものである。評者は、神門(2006)が指摘する農地政策の運用が極めて不透明・不公正であり、能力に長けた農業者に農地が集まらないとの意見には与するが、農業者の近視眼的な「地権者エゴ」(神門, 2006: 173)が農地流動化を妨げているとの意見には、何か割り切れない思いを抱いていた。本書は神門(2006)とは異なる観点から経済的合理性以外の農地移動プロセスを説得力を持って描いており、評者としても腑に落ちる部分が多かった。

ここで本書の内容を章構成に従って紹介する。本書は第1部において研究の課題と方法を整理し、第2部および第3部において各事例研究、第4部における結論と今後の研究課題という計4部8章から構成されている。

第1章「序論」では、日本における農地をめぐる情勢、および先行研究のレビュー、本書の目的および研究方法という形で、本書の骨子となる農地移動と社会関係に着目する著者の研究アプロー

チが示されている。本書の目的として著者は次の2点を挙げている。第1に「農地の維持に向けた農地移動に至るプロセスに、農家間のいかなる社会関係が存在するのか」という点。第2に「農業生産活動と村落の社会的特徴との相互関係を分析していくための分野横断的に援用可能な方法論の提示」という点である。そしてこの2点目に関して、社会ネットワーク分析によるアプローチを試みている。農地集積が進展しない理由として「知合いでない人への貸渋り」があるとよく指摘されることである。しかし農地移動や農地の維持にこうした「縁」が実際どのような役割を果たしているのか、真正面から取り組んだ研究はこれまで少なかったように思う。また本書は、「地縁」のような関係を一括りにする比喩的な捉え方ではなく、個々の農家を持つ具体的なネットワークを描き、関係が重なり合う多重送信的な「ムラ的な社会関係」までを射程に入れており、方法論の提示という点では熟慮されていると感じた。

第2部は大規模化に向けた農地移動と社会関係についての検討(第2章、第3章、第4章)となっている。第2章「北海道十勝平野における農地移動プロセスと農業経営の大規模化」では、事例地域として北海道十勝平野音更町の大規模畑作地帯を取り上げ、農地移動の展開を農家間の社会関係を分析することから明らかにしている。十勝平野では収益性向上の目的で農地移動が展開しているが、作業効率の点から集落や地区を中心とする狭域であることが望まれ、ムラ的な社会関係を通じた農地移動が中心であることを明らかにしている。安定した大規模経営のためには、賃貸契約の解消などのリスクが少ないムラ的な社会関係に基づくものがまず確保されることが重要で、その上で地区や集落の境界を超えた農地移動が間接縁を通じて拡大していく、と指摘している。

第3章「北海道十勝平野における大規模畑作経